

令和元年5月10日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2018

課題番号：17K18566

研究課題名（和文）画像史料からみた明治期綿紡績業の労働者募集

研究課題名（英文）Recruitment of Cotton Spinning Industry in the Meiji Era: An Approach from Visual Sources

研究代表者

平野 恭平（Hirano, Kyohei）

神戸大学・経営学研究科・准教授

研究者番号：10509847

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、写真帳、会社案内、労働者募集案内、絵葉書といった画像史料の分析を中心に据えて、明治期の綿紡績業での労働者募集をめぐる視覚メディアの利用が、募集人が介在することで労働者や農村社会に生じる不安や不信を取り払い、企業と労働者・農村社会との間の信頼関係の構築に寄与した点を明らかにした。他の分野に比べると、日本経済史・経営史での画像史料の利用は限られていたが、本研究では、様々な画像史料の収集・調査・分析を通じて、同分野での画像史料の利用の可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、明治期の綿紡績業での労働者募集をめぐる視覚メディアの利用によって、募集人が介在することで生じていた労働者・農村社会が抱える不安や不信を取り払い、企業と労働者・農村社会との間に信頼関係を構築しようとした挑戦的な試みがあったことを明らかにした。画像史料の調査・分析を中心に据えた本研究は、画像史料のもつ「ことば」や「イメージ」を丁寧に読み取り、新しい視角や論点の提示に努めようとしたことに学術的な意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Concentrating on the analysis of visual sources such as albums, company pamphlets, recruitment guide, and picture postcards, this research aims to illuminate how the visual media, used in the recruitment of cotton spinning industry in Meiji period, removes the uncertainty and distrust that occur in workers and rural society caused by the outside recruiter, and contributes to building the relationship of trust between the companies and the worker / rural society. Japanese economic history and business history rarely use the visual resources, however, this research will show the possibility of visual resources in Japanese economic history and business history by collecting, investigating, and analyzing kinds of visual resources.

研究分野：日本経済史・日本経営史

キーワード：経済史 経営史 画像史料 視覚メディア 写真 絵葉書 綿紡績業 労働者募集

1. 研究開始当初の背景

本研究の代表者は、研究開始前に『鐘淵紡績株式会社写真』(1905年発行)を入手したことを契機として、日本史の教科書にも度々登場してきた大阪紡績の写真について検証することになり、簡単な論考を執筆した(平野恭平、『鐘淵紡績株式会社写真』と大阪紡績工場写真,日本歴史,査読有,820,2016,65-72)。この『鐘淵紡績株式会社写真』は、同時期に株主向けに作成された『鐘淵紡績株式会社案内』(1906年発行)と比べると、労働者向けに作られたものであること、企業側が労働者に対して工場で働くことのイメージを与えるように意図して制作されたことが読み取れた。鐘淵紡績で最も古いとみられる写真帳が、このような意図をもって制作されていたことから、同時期の絵葉書や、その後の会社案内や労働者募集案内にも、労働者や農村社会に対して何らかのイメージの付与が企図されていたのではないかと考えるようになった。この鐘淵紡績は、留学、外字新聞記者、広告取次業起業などの経験をもった武藤山治によって率いられており、労働者重視の経営として福利厚生の実施を進め、労働者とのコミュニケーションを図るために日本初の社内報の発行や目安箱の設置も行っていった。また、鐘淵紡績は、紡績業の中では積極的に新聞広告を利用し、良好な企業イメージの形成にも務めていたこともあり、それらの取り組みと合わせて、明治期に新しく登場した視覚メディアをうまく活用していたのではないかと考えられた。

日本経済史・経営史の中で、このような視覚メディアの利用に着目することは、これまでの文書史料に基づく研究でほとんど取り上げられることのなかった画像史料の利用可能性を見出すことになり、従来の研究で触れられることのなかった論点を提示できるのではないかと考えられた。つまり、文書史料だけでは必ずしも明らかにすることができない、企業と労働者・農村社会との間にある情報の非対称性の克服や信頼関係の構築について考察することを1つの課題として設定するに至った。

また、鐘淵紡績での視覚メディアの利用を取り上げることは、日本経済史・経営史での研究に対して画像史料の本格的な利用の可能性を拓くことにつながるとも考えられ、この点でも本研究の実施を計画した。かつての歴史学は、記録の学問といわれたように、文書史料(文字史料)を中心に研究が行われてきたが、1980年代以降、文字史料以外に音声史料や画像史料などを用いた研究が登場するようになった。その背景には、発展段階論に規定された歴史から、唯一無二の個性ある歴史への脱皮という大きな潮流があり、また過去が主観的に構築されると考えられるようになったことも手伝って、史料に対する取り扱いに変化が生じてきたことがあった。しかし、日本経済史・経営史では、オーラル・ヒストリーを用いた研究こそ登場しているが、画像史料を用いた研究はほとんどみられなかった。近代以降、写真・印刷技術の発達によって、残存する画像史料は膨大な数に及ぶが、その多くは挿絵的に利用されるにとどまり、本格的な分析・考察の対象にされることは稀であった。

外国に目を転じれば、経済史・経営史分野であっても、企業イメージの形成や宣伝広告の展開など、画像史料を取り上げた研究がいくつもみられた。このような外国の先行研究や画像史料の分析を足がかりとして、画像史料の利用によって、文書史料に依拠するのみでは取り上げにくかった論点、敬遠されてきた論点、実証が難しいと思われてきた論点、見落とされてきた論点などを見出すことができれば、日本経済史・経営史での研究の方法に一石を投じることにつながるのではないかと考えた。実際には画像史料を用いても、文字史料に依拠する研究と同様の論点に行き着き、既存の主張を画像史料から補強する程度で終わるかもしれないが、画像史料のもつ「ことば」や「イメージ」を丁寧に読み取り、新しい視角や論点の提示に努めることにこそ本研究の学術的な意義があると考えられるに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、画像史料の調査・分析を中心に据えて、明治期の綿紡績業での労働者募集をめぐる視覚メディア、具体的には写真と絵葉書の利用が、募集人が介在することで生じていた労働者・農村社会が抱える不安や不信を取り払い、企業と労働者・農村社会との間の信頼関係の構築に寄与した点を明らかにすることである。本研究を通じては、日本経済史・経営史での研究に画像史料を利用することの可能性について検討することも1つの課題として考えられた。近代以降、残存する画像史料は膨大な数に及ぶが、技術史や建築史に比べると、日本経済史・経営史での利用は限られており、本研究が取り上げる明治期の綿紡績業についての研究でも同様の傾向であった。

明治期の綿紡績業では、労働者の高い離職率のため、労働者の熟練が高まらず、製品品質の向上を妨げる原因となっていた。また、綿紡績業では、労働者の引き抜きや農村での激しい募集競争が繰り返されていたことから、定着率の向上とともに安定的に労働者を確保することも、大きな課題となっていた。これまでの研究では、他社に比べて高い賃金やより良い福利厚生をもって、労働者を引き寄せ、その定着率の向上を図り、貢献意欲を引き出そうとしたことが、紡績企業の文書史料を中心に明らかにされてきた。その代表的なものが、先駆的な取り組みをみせた鐘淵紡績を対象とした研究であり、支配人が部下に対して発した書状『回章』に基

づいて考察されてきた。また、高い離職率を招き、募集を不安定にする一因となっていた募集人募集についても、紡績企業や行政機関の文書史料を中心として、労働者に対して待遇や職場環境を過大に宣伝し、手数料収入を稼ぐために利己的に動く募集人による労働者募集の弊害が明らかにされてきた。従来の研究の傾向としては、文書史料に依拠すると同時に、企業側の視点を中心に描かれてきた。そこでは、労働者が期待と現実のギャップに悩んでいたこと、労働者を送り出した農村社会がそのような事態を憂慮していたこと、企業がそのような事態を解消するために賃金や福利厚生充実以外でも試行錯誤していたことなどの検討・考察はほとんどみられなかった。

そこで、本研究では、これまで見落とされてきた写真帳、会社案内、労働者募集案内、絵葉書といった画像史料を取り上げ、それらの調査・分析を通じて、労働者募集をめぐる企業と労働者・農村社会との関係性を明らかにすることにした。さらには、このような画像史料の分析を行うことによって、日本経済史・経営史での研究に画像史料を利用することの可能性についても示し、これらの分野での今後のさらなる画像史料の利用による新しい研究の促進に寄与することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、綿紡績業の中で、明治期に新しく登場した視覚メディアを先駆的に利用した鐘淵紡績を取り上げ、その写真帳、会社案内、労働者募集案内、絵葉書といった画像史料を中心とした調査・分析を行い、労働者募集をめぐる企業と労働者・農村社会との間の信頼関係を構築する過程を明らかにすることを試みた。本研究を開始する以前、写真帳として『鐘淵紡績株式会社写真』(1905年発行)、会社案内として『鐘淵紡績株式会社案内』(1906年発行)、労働者募集案内として『織工志願者之栞』(1909年発行)、絵葉書(1905年頃制作)などの画像史料を準備していたが、明治期の綿紡績業での労働者募集をめぐる視覚メディアの利用の実態についてのより詳細な分析を行うため、さらなる画像史料の収集・調査と、それを補う文書史料の収集・調査を行うことを計画した。画像史料を補う文書史料については、本研究の代表者が所属する神戸大学経済経営研究所附属企業資料総合センターに「鐘紡資料」として鐘淵紡績の膨大な企業史料が所蔵されているため、それらの史料を利用することも計画した。

具体的には、平成29年度は、鐘淵紡績の写真帳、会社案内、労働者募集案内、絵葉書などの画像史料の収集・調査を進めると同時に、競合関係にあった大阪紡績、尼崎紡績、摂津紡績などの労働者募集に関連する史料の収集・調査も行った。この時期の視覚メディアの利用をめぐることは、日本にもたらされて間もないことから、写真・印刷技術に規定されることが大きかったため、写真・印刷技術の文献や史料についても収集・調査した。平成30年度も、引き続き各種史料の収集・調査を行い、画像史料の他にも、鐘淵紡績の労働者募集や労働者優遇策を取り上げた新聞・雑誌の記事の収集・調査も行った。

4. 研究成果

本研究では、視覚メディアを明治期に他社に先駆けて取り入れた鐘淵紡績を取り上げ、募集人が労働者を欺き農村社会で警戒が増す中で、そして紡績企業間での労働者募集が激化する中で、自社の労働環境を正しく農村社会や労働者に伝えて労働者募集を有利に進めるため、意図的に写真という当時の最先端の視覚メディアを利用していったことの一部を明らかにすることができた。また、労働者から郷里に送られた紡績企業発行の絵葉書についても、労働者と農村社会をつなぐ重要な視覚メディアの1つになっていたことが明らかにされた。このような活動を展開することによって、鐘淵紡績では、外部の募集人に依存しない労働者募集の体制が整えられていった可能性についても言及することができた。

写真帳、会社案内、労働者募集案内などに掲載された写真は、労働者に工場という場で働くというイメージを与え、募集人の誇張に起因する労働者の期待と現実のギャップを軽減する役割を担い、労働者の離職を予防する効果があった。また、絵葉書は、労働者から郷里の親族へのメッセージとともに、そこに印刷された写真を通じて、郷里の親族に遠く離れた地で働く娘たちのことを想起させると同時に、将来の労働者となり得る人々に紡績企業のイメージを伝えるコミュニケーション・ツールとなり、農村社会との信頼関係を築き募集地盤を確立する効果がみられた。このような視覚メディアを用いた取り組みは、鐘淵紡績が行う労働者重視の経営と相俟って、良質な労働力を安定的に確保することを可能とし、労働者に良好な企業イメージを醸成させて、企業への定着を促すことにもなった。これは、明治期に登場した新しい視覚メディアの利用によって、募集人が介在することで生じていた労働者・農村社会が抱える不安や不信を取り払い、企業と労働者・農村社会との間に信頼関係を構築しようとする挑戦的な試みであった。

本研究の成果については、まず平成29年度に社会経済史学会近畿部会(11月例会)・経営史

学会関西部会（11月例会）にて、明治期の綿紡績業での労働者募集についての先行研究レビューや明治期の綿紡績業の画像史料の分析を報告し、本研究の可能性についての議論を行い、多くの有益なコメントをもらうことができた。平成30年度には、それらのコメントに応えるべく行った追加の史料収集・調査を踏まえて、日本経営学会関西部会（12月例会）にて、明治期の綿紡績業での労働者募集をめぐる視覚メディアの利用についての報告を行い、歴史系の学会とは異なる観点からの有益なコメントをもらうことができた。これらの学会報告の成果を踏まえて学術論文を執筆し、現在投稿中である。この他にも、画像史料の利用という点では、『技術と文明』第21巻第2号（日本産業技術史学会）に掲載された論文にも、本研究の成果の一部が反映されている。また、アメリカのUniversity of the Pacificが現在進めている武藤山治デジタルミュージアム・プロジェクトにも、本研究の成果が生かされている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

平野恭平・牧田久美, 「ナイロンの衝撃」と日本の蚕糸業の衰退：アメリカ市場の変容とGHQによるデザイン育成, 技術と文明, 査読有, 第21巻第2号, 2017, 21-38。

平野恭平, 明治期紡績業の労働者募集と写真利用：鐘淵紡績の活動に注目して, 神戸大学大学院経営学研究科ディスカッション・ペーパー, 査読無, 2019・15, 2019, 1-29。

〔学会発表〕(計 2 件)

平野恭平, 明治期紡績業における労働者募集と写真利用：鐘淵紡績の事例を中心に, 社会経済史学会近畿部会（11月例会）・経営史学会関西部会（11月例会）, 2017, 於：京都大学。

平野恭平, 明治期紡績業の労働者募集と視覚メディア：鐘淵紡績の写真利用に注目して, 日本経営学会関西部会（12月例会）, 2018, 於：鳥取環境大学。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。